

■ 着任あいさつ

左藤 敦子

昨年の11月16日より当センターに着任しました左藤敦子です。私は筑波大学大学院心身障害学研究科を修了し、日立製作所に関連する財団の一つである日立家庭教育センターという施設に3年ほど研究員として勤務していました。日立家庭教育センターとは、「家庭教育」をキーワードに、34年にもわたって親と子の教室活動を実践している子育て支援の施設です。1年間という短い期間のプログラムですが、親子の絆をみつめなおし、子どもの心の温かさと豊かさを育てきたという実績は地域に深く根ざしており、何千組もの親子が修了生として巣立ってゆきます。

このような日立家庭教育センターでの教室活動は、成長著しい子どもたちの逞しさや親子の葛藤を肌で感じ、親子を支えていくスタッフの迷いや苦悩を共有していく日々の連続でした。そして、園庭ではしゃぎまわる子どもたちと向き合いながら「本当に一人ひとり違うんだなあ」という当たり前のことを当たり前のこととして、きちんと気づくことができた貴重な時間となりました。

日立家庭教育センターで出会った親御さんの思いや子どもたちのことを思い出すたびに「みなさんから教えていただいたことを活かしてがんばってます！」と胸をはって宣言できるまでに至っていない自分の力不足を実感する昨今ですが、これまでに考え、感じてきたことの重みを忘れずに、少しずつでも着実に前に進んでゆけるように努めてまいりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



■【報告】国際協力イニシアティブシンポジウム開催

3月15日（土）に、文部科学省と当センターの主催、国際協力機構（JICA）の共催で、「障害児教育分野における国際協力の現状と展望—現職教員の活動と領域間協働による自立的発展モデルを目指して—」をテーマにして、シンポジウムを開催しました。帰国隊員の活動をふり振り返りながら、途上国の自立的な発展に向けて、隊員の実績と国内からのサポートをどのように融合させるか、有意義な情報を得ることができました。



当センターでは、文部科学省の委託を受け、障害児教育分野で活躍する青年海外協力隊（JOCV）の隊員に対するサポート事業に取り組んできました。本シンポジウムを始め、自閉症教育DVD、国際協力イニシアティブブログ（<http://initiative.justblog.jp/blog/>）等の成果を蓄積してきています。今後も、これらの成果を発展させ、途上国の障害児教育の充実に貢献していくことが求められています。

（瀬戸口裕二）

■【報告】平成 19 年度 現職教員研修成果報告会・修了式

平成 20 年 3 月 18 日火曜日の 14:00 から東京キャンパスの第一会議室において、現職教員研修成果報告会が開催されました。指導法重視型研修プログラムの京屋 敦さん（秋田県立盲学校）、佐藤 操さん（秋田県立聾学校）、吉田公美さん（千葉県立袖ヶ浦特別支援学校）、長岡里実子さん（千葉県立印旛特別支援学校）、コーディネーター養成型研修プログラムの大竹由子さん（埼玉県立大宮北養護学校）、原 伸生さん（長野県立小諸養護学校）、および研究生の海老沢ひとみさん（埼玉県立宮代養護学校）の計 7 名が 1 年間の研修成果を報告しました。研修テーマは以下の通りです。

「視覚障害児の能動的な環境認知を促す自立活動について」

秋田県立盲学校 京屋 敦（指導教員 前川久男）

「新生児聴覚スクリーニング後の聴覚障害乳幼児と保護者への支援について」

秋田県立聾学校 佐藤 操（指導教員 前川久男）

「特別支援学校(肢体不自由教育)における個別の指導計画の活用」

千葉県立袖ヶ浦特別支援学校 吉田公美（指導教員 安藤隆男）

「知的障害特別支援学校における自立活動担当者の役割についての考察」

千葉県立印旛特別支援学校 長岡里実子（指導教員 藤原義博）

「通常学級教師の主體的な教育マネジメントを実現するための支援について」

埼玉県立大宮北養護学校 大竹由子（指導教員 安藤隆男）

「特別支援学校の専門性を生かしたコンサルテーションについての考察」

長野県立小諸養護学校 原 伸生（指導教員 前川久男）

「個別の指導計画の作成過程における重度・重複障害児担任教師の集団討議」

埼玉県立宮代養護学校 海老沢ひとみ（指導教員 安藤隆男）

報告会に引き続いて修了式が行われました。センター長のあいさつ、修了証書授与に続いて、来賓として臨席された石隈次長から研修生へのねぎらいとはげましのご祝辞をいただきました。研修生の皆さんは来年度からそれぞれの現場に戻り、1 年間の研修の成果を発揮しご活躍されることを祈念いたします。



【 現職教員研修 研修生日記 】

「終わっちゃったなあ・・・」研修成果報告会が終わり、みんなと別れ、一人になった電車の中でしみじみ感じました。

一年前は、長期間に渡って研修できることは嬉しいけれど、計画的に研修を進めることや、その成果をまとめることなど本当にできるのだろうか、不安の方が強かったことを覚えています。そんなふうイメージが描けないまま始まった研修でしたが、センターの先生方の講義や大学院の聴講、公開講座への参加、附属学校での実習を重ねるうちに、今までの実践で、成功した支援とそうではない支援の違いの理由が、少しずつですがみえてきました。そして、自分に足りない面や得意な面を考えるようになりました。長期研修という機会をいただけていなかったら、自分のこれまでの実践について、時間をかけて考えることはなかったと思います。本当に貴重な一年でした。

研修は終わりましたが、子どもたちとの日々が、また新しく始まります。急がず、焦らず、前向きに（時々休憩しながら・・・）過ごしていきたいと思っています。ありがとうございました。

（千葉県立印旛特別支援学校 長岡里実子）

1年間の研修を振り返ってみると「たくさん歩いたなあ。」というのが感想です。研修テーマが、歩行指導なので、当たり前ともいえますが、日常の生活でも、とにかく、たくさん歩きました。

秋田から東京に着いたばかりの頃は、電車の乗り換えに毎日キョロキョロしていました。初めて降りた池袋駅では、歩いている人の多さ、複数の路線、東口の西武と西口の東武などで、自分がどこへ行くのかもわからない状態のまま流されていました。

しかし、そんな池袋も、歩行指導の下見をしたり、ジュンク堂で専門書を買ったり、サンシャインに遊びに行ったりしたなかで、いつの間にか自分の見知った状況へと変わっていました。

視覚障害者の歩行の環境認識も、このような感覚なのかと思いました。その意味でも、筑波大学附属視覚特別支援学校で、実際の歩行指導を行えたことは、貴重な経験となりました。センターでの講義の中でも、根本的な事柄について考えるよい機会になりました。これまでの自分の実践をじっくりと振り返ることができました。

秋田に戻ってからは、研修の内容をどのように生かしていくのかということが、これからの私の課題となります。1年間、ありがとうございました。

（秋田県立盲学校 京屋 敦）

センターの先生方による講義は、普段なかなか聞くことができない各障害種の基礎的内容から最新の情報に至るまで、毎回充実した時間でした。初めて聞くこと、知ることが多くて特別支援教育の奥深さを感じました。

現職教員研修生の皆さんとは、現場を離れ共に学ぶ仲間としてたくさんの情報交換をさせていただきました。ゆとりある時間の中で語り合うことの大切さを痛感しました。また、お互いの学校や県の情報を交換する中で視野を広げ、自校を見つめ直すことができました。そして、多くの公開研究会やセミナーに参加したり、今までだったら遠くて行けないとあきらめていた秋田や京都の学校に、日帰りで行ってしまったりなんて無謀な（？）計画が実行できたのも研修仲間の皆さんの行動力のおかげであり、研修生活の醍醐味でした。

教師になってから今年ほど出会いの多かった年はありません。きっと、この一年が私にとって新たなスタートをきるための充電期間だったのだと思います。この一年間の経験と出会いを大切にしながら、子ども達と共に気づき、学び、成長していきたいと思っています。

（埼玉県立宮代養護学校 海老沢ひとみ）

■ 【報告】国際教育協力イニシアチブ事業：海外巡回相談（マレーシア訪問）



3月20日～24日に、障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポートを目的として、安藤隆男教授ほか3名のセンタースタッフで、マレーシア・トレンガヌ州を訪問しました。

現地のPDK（地域コミュニティ運営の障害者拠点センター）における現職教員隊員の指導場面の観察、現地のワーカーを含めたケース検討会への参加、派遣隊員現地勉強会（養護隊員3名、ソーシャルワーカー、理学療法士各1名が参加）等を実施しました。写真は、派遣隊員の先生方がチームとなって活動している様子です。

【現職教員研修 修了生の声「苦言・提言」】

特別支援教育研究センターの入り口で、修了書を胸に写真を撮った日のことを、この原稿を書きながら昨日のことに思い出しています。茗荷谷の駅に降り立った2年前。自分が何を勉強したいのか、1年後の自分がどうなっているのかもまるでわからず、ただ不安だったあの日。研修場所の久里浜までの片道3時間は、さながら小旅行のようでした。

そんな研修を1年行い、実感として一つこの手につかんだものがありました。それは、自閉性障害のある子どもたちが特定の人と築く「愛着関係」の大切さです。コミュニケーションの手段を指導する前に、大切に、大切に育てていかなければならない「心」でした。どうしても自閉性障害があるからと、特性にあった指導ばかりに目を向けてしまいがちであり、私も以前はそうでした。でも、そうでないことを知った今、1番に伝えたいと思ったことがこの「心」です。幸い現場に戻って研修の成果を報告させていただける場があり、「自閉性障害のある子どもたちとどうか『心』をつないでください」と言ってきたつもりです。

昨年私は現場に戻りました。日常の生活に追われ、身にしみたはずの「心」の大切さをついつい見失いそうになってしまいます。そんなときはふと立ち止まり、センターでの日々を思い起こします。私にとってあの1年間の先生方の教え、仲間達と歩んだ日々は何にも勝るエネルギー源です。学ぶことの大切さ、おもしろさを学んだのもこの1年でした。現場では、特別支援教育のすべてにおいて、知識やリーダーシップを求められています。少しでも現場の声に届いていけるよう、ますます研鑽を積んでいくことが、センターの先生方への恩返しではないかと思っています。ますますがんばら…っていくつもりです！



（平成17年度 修了生 千葉県 印西市立木刈小学校 深澤 朱美）

■ 巻末言

先日、久しぶりに卒業生T君のお母さんが訪ねてきてくださいました。高等部を卒業し、S生活園に通う毎日のT君を担当したのは、もう10年以上も前のこと。ことばでの意思表示は難しくても、やりたいこと、嫌なことを態度で示し、楽しい時は嬉々とした表情で喜びを伝えてくれたT君でした。T君が空き缶回収等の作業に生き生きと取り組んでいる様子を話している中で、「卒業しても伸びます」と穏やかな笑みを浮かべながら確信に満ちたお母さんの一言。心が暖かな春色に染まりました。（H）